

丹鶴叢書

信實朝臣集 完

093.1

2006

佛教大学図書館



2005494747





丹鶴叢書 己酉帙

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻



信實朝臣家集撰

春歌

新ら花影もく人かよみはふたつ

けしきもくちめやえのせきくちかはるらむ

一條入道太政大臣家よきみかよのせき人

よみはしよ

新ら花影もく人かよみはふたつ

丹鶴叢書

寛元三年八月右大弁入道法華經の料帛

のしほ百箇をいへり

のしほ

當のしほをいへり

前孫大納言に

まはれどもたむさひのしほは

入道二品親王に

しほのしほをいへり

まはれぬしのしほは

經のしほをいへり

新後撰春上

信実

まはれぬしのしほは

指改教人のしほをいへり

のしほをいへり

まはれぬしのしほは

前者大納言家のしほをいへり

のしほをいへり

新後撰
の
建保元年

五月廿一日
西園寺

法性寺
入道

五月廿一日
西園寺

五月廿一日
西園寺

信実

法性寺入道
自教
大長
の
寺
時
入
道
百
首

五月廿一日
西園寺

五月廿一日
西園寺

五月廿一日
西園寺

五月廿一日
西園寺

丹波書

昔のまゝかゝるもよもやなきはなほさくろふもあらん
酒のさきとせむ

むろしよとよかかゝるもよもやなきはなほさくろふもあらん

九條内大臣家より海老の原より

此のちのちとせむのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

兼之え内裏市前合水色文字

おのしとせむのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

按政殿市百首より移の納涼

むろしよとよかかゝるもよもやなきはなほさくろふもあらん

新立北野より夏野

信天

風よよめおちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
九條内大臣家市百首より夏野
むろしよとよかかゝるもよもやなきはなほさくろふもあらん

千鳥長書

秋分

貞永元年秋分掛取家五ノ部百ノ部ノ部

秋

新勅撰秋上

よる波の涼しくもあるの秋の神一のうらた秋のうらた

前藤大納言家五十ノ部百ノ部ノ部

秋とてなふもいさうたあまののち七日の昔とまらん

寛元三年九月法性寺教より秋に中そらん

かきこし傳へよ

天のうらたのうらたあまののち七日の昔とまらん

秋のうらたあまののち

新勅撰秋上
よる波の涼しくもあるの秋の神一のうらた秋のうらた

信来

新勅撰秋上

なほうらたのうらたあまののち七日の昔とまらん

掛取殿百ノ部百ノ部ノ部

かきこし傳へよ

九條内大臣家より秋に中そらん

まのうらたのうらたあまののち七日の昔とまらん

建保五年内裏御の合子

秋のうらたのうらたあまののち七日の昔とまらん

秋のうらたのうらたあまののち

くまのうらたのうらたあまののち七日の昔とまらん

草花をわらへよ

丹鳥長男

いさよひにまよひておぼろげなる御筆

法性寺殿抄首よ

秋のあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

按政殿序よまゝ田家鹿

このかたの板のまじりておぼろげなる御筆

経の巻くよ百首よ

このあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

新の巻くよ百首よ

このあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

おなごの巻くよ百首よ

信実

焼古今秋上たいしんす

物事のあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

法性寺殿抄首よ

秋のあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

九條内大臣家よまゝ田家鹿

このあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

経の巻くよ百首よ

このあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

新の巻くよ百首よ

このあけぼのの雲の影のさし入る藤の葉のまじりて

玉兼秋下

寛元二年八月十日おぼろげなる御筆

統古載秋上

~~~~~  
法性寺殿廿三

~~~~~

接政殿序百~~~~

統古今秋上

~~~~~

同~~~~

~~~~~

~~~~~

統後撰秋中

~~~~~

信実

統後月のの中の

~~~~~

~~~~~

~~~~~

八月十五日一條入道大政大臣家家圓圓の月

新後撰秋上

~~~~~

貞永元年八月十五日大政大臣家家名名月月

統古今神

~~~~~

五社家合合乃乃月月

~~~~~

新新始始銘銘乃乃月月

御書に奉り申上り候御事
按改殿は可なりと申上り候

御書に奉り申上り候御事
御書の御事可なりと申上り候

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

新勅撰秋下

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

信実

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

擣衣

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

御書の御事可なりと申上り候
御書の御事可なりと申上り候

統後秋のふりかへ

統後撰秋下

貞承元年癸未秋八月廿一日
法性寺殿書

此書は法性寺殿に在りて
法性寺殿に在りて
法性寺殿に在りて
法性寺殿に在りて

信実

冬款

統後撰冬

二品親王

此書は二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて
二品親王に在りて

建保四年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

新拾遺冬
建保五年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

新勅撰冬
建保六年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

建保七年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

建保八年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

信実

建保九年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

建保十年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

建保十一年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

建保十二年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

建保十三年丙申の冬に
紙の料を乃可申す

たかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう

西園寺のふりやう

続後撰冬

下折のたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう
はたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう
をたかきくまのふりやう

前岳部郷舎のふりやう

つたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう
建保六年丙申七月廿二日

結末

続拾遺冬

つたかきくまのふりやう

たかきくまのふりやう

たかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう
七十三

たかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう

たかきくまのふりやう

たかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう
たかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう

たかきくまのふりやうのたかきくまのふりやうのたかきくまのふりやう

丹波叢書

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

信文

信文

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

とてしる

とてしる

新納 権大納言信
云合一付るも小様志
とてしる

とてしる

新納撰恋五

五社交合よむ

三新納
建保五内裏款合

新納撰恋五

信実

同清款合

新納撰恋五

新納撰縁
わし新納

とてしる
とてしる
とてしる
とてしる

とてしる
とてしる
とてしる
とてしる

とてしる
とてしる
とてしる
とてしる

我意ハ一筆のほろろと云ふは新後

新後撰意四 新後

もよほたる人 小巻古

京極中納言 新後

おぬ人のほろろと云ふは新後

三條の侍候之位 新後

ほろろと云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

西宮の侍候之位

続古洞院拾遺歌
百三十三

続古今恋五

同
百三十四の沖

信安

同恋三

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

と云ふは新後

続十載意四

かきつりぬる人

意ゆきもくちのきりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
意ゆきもくちのきりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人

湊舟のりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
友大納言の家かきつりぬる人かきつりぬる人
かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
回家月かきつりぬる人かきつりぬる人

はるか海かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人

信実

雑記

新つ指題かきつりぬる人

かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人

かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人

かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人

かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人
かきつりぬる人かきつりぬる人かきつりぬる人

Main body of handwritten text on the left page, enclosed in a rectangular border. The script is a cursive style with several lines of text.

Main body of handwritten text on the right page, enclosed in a rectangular border. The script is a cursive style with several lines of text.

と云ふは、松の皮風を指す。松の皮は、

と云ふ

人を知る。松の皮は、松の皮は、松の皮は、

と云ふ

床のしほを枕する。松の皮は、松の皮は、

法意

七や、松の皮は、松の皮は、松の皮は、

五社のしほを枕する。

九や、松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、

信遠

丹雀養書

と云ふ

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

松の皮は、松の皮は、松の皮は、

続後 丹雀養書

続後撰下

続拾遺様書の中

同秋中
 大宮之位入道まほ懐
 月
 同秋中
 大宮之位入道まほ懐

続拾遺様書の中

信実

釋迦善述

同秋中
 大宮之位入道まほ懐

続後撰様書の中

同秋中

大宮之位入道まほ懐

丹鳥養書

徳拾洞院抄政百
その上縁

徳古洞院抄政百
その上縁

おのころのむらさき...
道...
貞水...
徳拾遺縁

徳古全縁
右大弁入道...
徳古全縁

信奥

新後撰雑上たいい

新後

貞水のめ...
新後撰雑上たいい

徳古今雑中

徳古

同上

同上

八幡...
徳古今雑中

同百首...
徳古今雑中

丹波書目

我意もあはれおかしき人なるべしとて
前者大納言家十五日

入道二品親王の御下向の
御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向
御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向
御下向の御下向の御下向の御下向

新勅撰雜三
御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向
御下向の御下向の御下向の御下向

信矣

貞承元御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向

~~~~~

御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向

御下向の御下向の御下向の御下向

名取述懐

御下向の御下向の御下向の御下向

寶治九年の御下向の御下向の御下向



江上眺亭

<sup>本</sup>みまのきゝのよきいひのさかきつとていふ江上なる沖つ白浪  
聖にや 幸と氣

なまよしのの聖中のかさひのあまのこ  
あまのこたあまのこたあまのこ

此一帖

信実朝臣集

依父卿命以家本令

書写被附属了藤原光芳者也後年

依所望加奥書畢

享保二十一年二月三日

左中将為村

丹  
管  
書

九  
四  
止

信  
実

